

アジア・南太平洋地域における ベランダコロニアル建築に関する比較研究

建築歴史文化研究センター・教授 江面嗣人
工学部建築学科・准教授 八百板季穂

ベランダコロニアル建築とは？

・17世紀～19世紀にかけて、欧米諸国の植民地で発展
・その土地の土着の建築と宗主国の建築様式とを結合させて作り上げられていく

1階の屋根を張り出して
設ける縁側空間（ベランダ）



旧グラバー邸（長崎）



リサーチ・クエスチョン①
伝統的な住宅形式から
どのように発展したのか？
(理解には復元的調査が不可欠)



リサーチ・クエスチョン②
国・地域間の影響は？

目的

ベランダコロニアル形式の住宅に注目

- ①これまで知られていない、各国におけるベランダコロニアル建築の起源と発展を明らかにすること
- ②また国・地域間における具体的影響を明らかにすること
- ③岡山理科大学の強みをいかしたアジア・太平洋地域における木造建築の文化遺産保全の研究・国際協力の拠点化



これまでの研究成果

～フィジー共和国旧首都レブカにおける住居の特徴と変遷について～

- ・レブカにおける歴史的建造物の特徴について明らかにした。
- ・南太平洋におけるコロニアル建築の特徴と変遷の一部を明らかにした。
- ・レブカの歴史的建造物の修理方針が明らかになった。



1. 研究の背景と目的

フィジー共和国旧首都レブカは2013年にユネスコ世界遺産に登録され、一部の研究機関による調査が行われた。レブカの世界遺産としての価値は、イギリス植民地時代の建築物が多く残っており、南太平洋の発展を知る上で重要性を有する点であるとされている。しかし、実際のレブカにおいて建築年代が判明している建物は少なく、保存や修理のための方法も確立されていない。

そこで本研究ではレブカに残る歴史的建造物の特徴と変化を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

現地における外観調査から、おおむね1960年代頃までに伝統的な大工技術によって建てられた建築物を抽出した。それらの建築の実測調査により平面図、断面図および復原図を作成して分析し、間取りの変遷や構造の特徴を明らかにした。

3. レブカについて

レブカは日本の南約7000kmに位置するフィジー共和国の旧首都である。熱帯雨林気候に属し、年間を通して温暖である。1874年にイギリス領地となり、レブカが最初の首都として選ばれた。レブカは平地が狭く、サンゴ礁により大型船の入港が困難であったことから、1882年にフィジー本島の現首都スバへ遷都されたが、レブカはその後1960年代頃まで中継貿易港として栄えた。



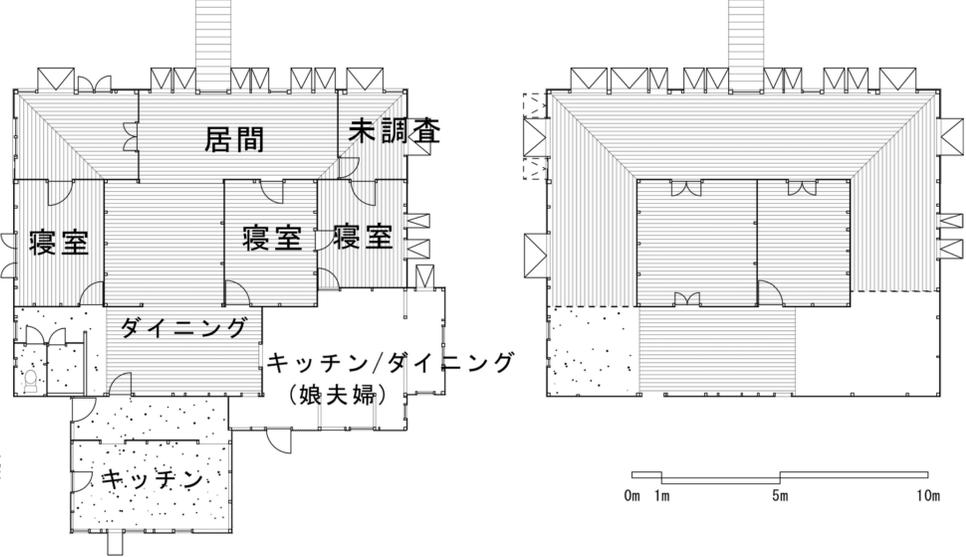
▲フィジー共和国とレブカ



▲町家型建築



▲当初の形式をそのまま残す小規模建築



▲戸建型住居の現状平面図および復原図

4. 建物の区分について

レブカの建物は主に戸建型、町家型、その他に分類される。戸建型は専用住居として用いられる建物で、平地から高台にかけて広く分布する。町家型は住居以外に倉庫や店舗等複合的に用いられ、ビーチストリートに面して建つ兼用住居等である。その他に区分した建物では、学校や教会、病院など島の中心地として必要な公共施設がある。またホテルや娯楽施設など、首都として発展していたことが伺える建物が残っている。

5. 建物について

歴史的建造物の7割が木造で、柱や壁材は統一規格のものを用いており、近隣諸国でも同様の形状の木材の使用が確認された。戸建型はバンガローと呼ばれる形式で、コロニアル建築の特徴が確認された。

住居は復原によって、建築当初は身舎は部屋数が少なく、周囲は開放されたベランダであったことが明らかになった。利用方法にはフィジーの伝統的な住居であるブレの名残りが確認され、現地文化との繋がりが明らかになった。

～フィリピンにおけるコロニアル期を起源とする折衷建築バハイ・ナ・バトの特徴と変遷について～

1. 研究の目的

フィリピン国内には、スペイン領期に成立した「バハイ・ナ・バト」建築に着目し、実測調査を通じて間取りの変遷の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

フィリピンマプア大学の協力を得て、バハイ・ナ・バト建築が残される3つの集落を視察し、外観的特徴を確認した。許可が得られた家屋については、内部も視察した。これらのうち、2棟に対して実測調査を実施し、平面図、断面図および復原図を作成して分析し、間取りの変遷や構造の特徴を明らかにした。

3. バハイ・ナ・バト建築について

バハイ・ナ・バトは、タガログ語で「石の家」という意味で、スペイン植民都市において、1800年代後半より多く建設された住宅様式をいう。1階は石造、2階は木造を基本とする。外観の特徴でもある格子窓は、ガラスの代用品として薄く切った貝殻を埋め込んだものであり、中国・日本の影響といわれている。バハイ・ナ・バトは、スペイン、中国、「土着」のフィリピンの様式が混じり合った折衷様式の建築といえ、このバハイ・ナ・バトの町並みが残される「ビガン歴史都市」は、世界遺産にも登録されている。



▲Daelo Ancestral House 現状平面図 (2階)

◀Daelo Ancestral House

4. Daelo Ancestral House

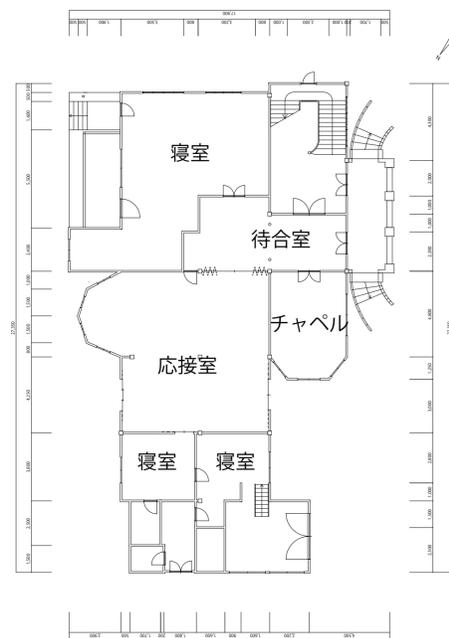
実測調査を実施した住宅 Daelo Ancestral House では、1階部分を倉庫として利用する一方、2階を生活空間として使用していた。現状では、居間と寝室が壁で区切られているが、復原すると当初は現在リビングルームとして使用されている1室のみであり、それ以外は後の増築であることが分かった。

5. Dr. Luis Santos Ancestral House

実測調査を実施した住宅 Dr. Luis Santos Ancestral House は、1930年に診療所兼住宅として建てられた。1階部分を診察室や食堂として利用する一方、2階を病室および生活空間として使用していた。

6. 今後の展開

今年度の調査では、ビガン歴史都市内のバハイ・ナ・バトを実測調査する予定である。異なる時代のバハイ・ナ・バトを調べることにより、バハイ・ナ・バトの間取りなどの変遷を理解することができる。



▲Dr. Luis Santos Ancestral House 現状平面図 (2階)

◀Dr. Luis Santos Ancestral House